

## 書かれたテキストでの アバル語の-gunの使われ方\*

山田 久 就

### 1. はじめに

日本語で“太郎が次郎と（一緒に）リンゴを食べた”と言うと，“一緒に”という副詞があってもなくても，太郎と次郎と一緒にリンゴを食べたことを意味するが，太郎は中心的な動作主として，次郎は補足的な動作主として表現されている。この場合の次郎のように，別の名詞と一緒に同じ意味的な役割で行為に関わっているが中心的でなく補足的に表現されている人あるいは物を，以下，随伴者と呼ぶことにする。アバル語で随伴者を表現する一つの方法に，随伴者を表す名詞に後ろから-gunあるいは-ginを付加する方法がある（Bokarev 1949: 218-219, Madieva 1967: 266, Madieva 1981: 142-143,

\* 標準アバル語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが，ラテン文字へ次のような転写を行って，標準アバル語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гъ=ǧ, гь=h, гI=ǧ, д=d, e=e, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=q', кь=ǧ', κI=k', л=l, ль=l', м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=t', у=u, ф=f, x=x, хь=q, хь=ç, xI=h, ц=c, цI=c', ч=č, чI=č', ш=š, щ=šš, э=è, ю=ju, я=ja, ъ='。アバル語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず，ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABS: absolutive (絶対格); AM: agreement marker (一致標識); CO: coordinating (等位接続); COM: comitative (随伴); CNV: converb (副動詞); DAT: dative (与格); ERG: ergative (能格); GEN: genitive (属格); IMP: imperative (命令形); INF: infinitive (不定詞); LAT: lative (向格); LOC: locative (位格); MAS: masdar (動名詞); NEG: negative (否定); PACNV: past converb (過去副動詞); PL: plural (複数); PRCNV: present converb (現在副動詞); PRS: present (現在); PRS2: 2-nd present (第二現在); PRT: participle (分詞); PST: past (過去); TRA: translative (経路格)。アバル語の位格，向格，奪格，経路格はそれぞれ5系列から成っていて，位格，向格，奪格，経路格の後ろの数字は，その系列を表す。

Ajtemirova 2007: 115-116, Surxaeva 2007: 116)。アバール語の $-gun$ は随伴者を表す場合以外でも使われることがある。本稿の目的は、アバール語の $-gun$ が標準アバール語で書かれた出版物でどのような使われ方をしているのか示すことにある。アバール語は、コーカサス（カフカス）地方の北東部、特に、ロシア連邦ダゲスタン共和国で話されていて、ダゲスタン諸語（北東コーカサス諸語とも呼ばれる）に属している。アバール語の名詞、代名詞は格変化し、絶対格／能格型の基本格体系を持っている。

## 2. 随伴者

日本語の“AがBと（一緒に）～する”におけるBのように別の名詞と一緒に同じ意味的な役割で行為に関わっているが中心的でなく補足的に表現されている人あるいは物を随伴者と呼ぶことにしたが、さらに、Aを随伴者Bに対する主と呼ぶことにする。すでに述べたように、アバール語では、 $-gun/-gin$ を名詞の後ろに付けて随伴者を表すことができる。(1)がその例である。

- (1) jas-gun            xut'ana            dun.  
 娘.ABS-COM    残る.PST       私.ABS  
 「私は娘と残った」[MP1-S: 96]

(1)では、絶対格の名詞に $-gun$ が付いている。 $-gun/-gin$ が付く名詞は常に絶対格をしているわけではない。Bokarev (1949: 219) は、 $-gun/-gin$ が属格名詞に付くことがあることを述べている<sup>1</sup>。 $-gun/-gin$ が属格名詞に付いている例を(2)に示す。

<sup>1</sup> Bokarev (1949: 219) は $-gun/-gin$ が絶対格名詞に付くことがあることは明示的には述べていない。彼にとっては当たり前すぎることなのであろう。

- (2) Feridal-gun            xabaraldasa    xaduw  
 Ferid.GEN-COM    話.ABL1        後  
 c'aq'            q'warid        wuk'ana            Kamil.  
 とても    悲しい        いる／ある.PST    Kamil.ABS  
 「Feridとの話の後, Kamilはとても悲しそうだった」 [MP1-S: 29]

私が調べたテキストでは、主格名詞、属格名詞の他、(3)のように能格名詞に付いていること、(4)のように第三位格（基本的な意味は「～の中に」）の名詞に付いていることがある。

- (3) Halmağzabaz-gun    cadaq    co    hedinab    tarašš  
 友達.PL.ERG-COM    一緒に    一つ    そのような    子犬.ABS  
 t'aŋinabuna            nižeca.  
 無くならせる.PST    私達.ERG  
 「私達は友達達といっしょに一匹のそのような子犬を無くならせた  
 （殺した）」 [ShM1-C: 35]
- (4) Ğozuŋ-gun                    wağize            guč  
 その人.PL.LOC3-COM    戦う.INF        力.ABS  
 「その人達と戦う力」 [SurM-T: 27]

絶対格、属格、能格の名詞に-gun/-ginが付いている例はテキストに大量に出てくるが、第三位格名詞に-gun/-ginが付いている例は、4例あるだけで、その4例は一人の著者の2冊の本の中にある。したがって、第三位格の名詞に-gun/-ginを付けるのは一般的ではなく、かなり限定的な現象である。もしかしたら、著者の方言からの影響かもしれない。

上に示した(3)では、-gunが副詞cadaq「一緒に」とともに用いられている。アバール語では、-gun/-ginと副詞cadaqの組み合わせで「～と一緒に」を表すこともできるが、(5)のように、副詞cadaqの前に第一位格（基本的な意

味「～の上に」)の名詞を置いて「～と一緒に」を表すこともできる (Bokarev 1949: 219)。

- (5) Dun        inč'o                    hezda                    cadaq.  
私.ABS    行く.PST.NEG        その人.PL.LOC1    一緒に  
「私はその人達と一緒に行かなかった」 [ShM2-Q: 36]

随伴者を表す際に、アバール語では、副詞*cadaq*が頻繁に使われる。同様の環境で、日本語の“一緒に”もよく出てくるが、英語の*together*やロシア語の*vmeste*「一緒に」はあまり出てこないように思われる。「一緒に」を意味する副詞の使用頻度には言語間でかなりの違いがある可能性がある。

次に、*-gun/-gin*で表されている随伴者の主について考える。随伴者の主は、(1)では絶対格で現れている自動詞のSであり、(3)では能格で現れている他動詞のAである<sup>2</sup>。(1)、(3)の随伴者が動詞の従属要素であるのに対して、(2)では随伴者が名詞*xabar*「話」の従属要素である。(2)では、随伴者の主は、明示的に現れていないが、明示的に表現するなら属格名詞になる。随伴者の主は、この他、(6)のように、他動詞のOであることがある。

- (6) hit'inaw    was-gun                    taraj                    İadijalda  
小さい    息子.ABS-COM    残す.PRT.PST    妻.LOC1  
「小さい息子と（一緒に）残した妻」 [RG1-G: 220]

私が調べたテキストでは、*-gun/-gin*で表されている随伴者の主は、自動詞のS、他動詞のAおよびO、名詞に従属している属格名詞だけである。

<sup>2</sup> 本稿では、主語、直接目的語という用語は使わず、自動詞のS、他動詞のAおよびOという用語を使う。複合動詞でない場合、アバール語では、自動詞のSと他動詞のOは絶対格であり、他動詞のAは能格である。本稿では、二項自動詞の一つの項はSであり、もう一つの項はS、A、O以外の要素である。S、A、Oの違った使い方もあるので、誤解が起らないように書いておく。

-gun/-ginで表されている随伴者の主が、自動詞のS、他動詞のA、他動詞Oのどれであっても、副詞*cadaq*が伴われていることも伴われていないこともある。一方、-gun/-ginで表されている随伴者の主が名詞に従属している属格名詞である場合、副詞*cadaq*が現れている例文はない。これは、副詞が名詞を修飾することがないためであろう。

上で述べたように、副詞*cadaq*の前に第一位格の名詞を置いて「～と一緒に」を表すこともできる。(5)では、随伴者の主は自動詞のSであるが、随伴者の主は他動詞のAであることも、他動詞のOであることもある。私が調べたテキストでは、随伴者の主は自動詞のS、他動詞のA、他動詞のOのどれかであり、それ以外のパターンは見つかっていない。

次に、-gun/-ginが付いている名詞の格に話を戻す。上に述べたように、私が調べたテキストでは、-gun/-ginの前にある名詞の格は、一般的には、絶対格、能格、属格のどれかである。(3)は、能格名詞に-gunが付いて随伴者を表しているが、随伴者の主は他動詞のAである。能格名詞に-gun/-ginが付いている随伴者の主は、常に、他動詞のAである。それ以外の例は、調査したテキストには見つかっていない。一方、他動詞のAの随伴者が-gun/-ginで表されている場合、-gun/-ginの前にある名詞は、常に、能格名詞であるわけではない。テキストでは、能格名詞の他、絶対格名詞、属格名詞に-gun/-ginが付いて、他動詞のAの随伴者を表現している例もある。名詞の従属要素である属格名詞に対する随伴者は、ほとんどの場合、(2)のように、属格名詞に-gun/-ginが付いた形をしているが、主格名詞に-gun/-ginが付いた形をしている場合も少数ながら観察される。自動詞のSの随伴者は、ほとんどの場合、(1)のように、絶対格名詞に-gun/-ginを付けて表現されるが、ごく少数ではあるが、属格で表現されている例も見られる。他動詞のOの随伴者は、私が調べた限りでは、全ての例で、-gun/-ginの前の名詞は絶対格をしている。どのような条件でどのような格の名詞が-gun/-ginの前に現れるかについてはさらなる調査が必要である。

### 3. 携帯物

英語の前置詞*with*, ロシア語の前置詞*s*+具格名詞と同様に, アバール語の*-gun/-gin*は, 随伴者を表現する以外, 携帯物「～を持って」を表すことができる。先行文献で随伴者の意味と携帯物の意味を区別して議論されていることはない。私が参考にした先行文献はどれもロシア語で書かれていて, ロシア語の前置詞*s*+具格名詞も, 随伴者を表す場合にも携帯物を表す場合にも使われるからであると思われる。先行文献の例文には, *-gun/-gin*が随伴者の意味で使われている例と携帯物の意味で使われている例が混じっていることが多い。英語, ロシア語, アバール語と違って, 日本語の“と”は, 随伴者を表現する場合には使われるが, 携帯物を表す場合には使われないので, 本来的には, 二つの用法を区別して, その可能性を明示的に述べる必要があると思われる。(7), (8)が携帯物を表すために*-gun/-gin*が使われている例である。(8)では, 携帯物がある場所が位格で表されているが, 私が調べたテキストで判断すると, *-gun/-gin*が携帯物を表している場合, その場所を表す位格が現れていることが多く, その数は, 半数をかなり超えている。

- (7) jaraġ-gun            rač'un            rugo            nuž  
 武器.ABS-COM    来る.PACNV    いる／ある.PRS2    あなた達.ABS  
 nižer            mušruzde.  
 私達.GEN        山.PLLAT1

「あなた達は私達の山々に武器を持ってきている」[MM-G: 129]

- (8) Qatił'            awtomatal-gun            çwadulel            rugo  
 手.LOC4    自動小銃.PL.ABS-COM    歩く.PRT.PRS    いる／ある.PRS2  
 mextaral                            soldatal.  
 酔っ払った                            兵隊.PL.ABS

「酔っ払った兵隊達が手に自動小銃を持って歩いている」[ShM1-C: 25]

(7), (8)では, -gun/-ginで表されている携帯物の所有者は, ともに, 自動詞のSである。テキストでは, 自動詞のS, 他動詞のA, 他動詞のOの携帯物である例が見られるが, それ以外は見つかっていない。

-gun/-ginで携帯物を表す場合, 自動詞のS, 他動詞のA, 他動詞のOのどの携帯物であっても, -gun/-ginの前に来る名詞は常に絶対格である。それ以外の格をしている例は私のテキストには見つかっていない。これは, -gun/-ginが随伴者を表す場合の用法と, 携帯物を表す場合の用法での大きな違いである。

-gun/-ginの携帯物としての用法の拡張的な用法であると思われるが, (9)のように, 「～を持って」とは訳すことができない例もある。

- (9) ǵaʒalda ǵwaridab ruḡun-gun wegaraw [...]  
 肩.LOC1 深い けが.ABS-COM 横になる.PRT.PST  
 「肩に深いけがをして横になった[...]」 [MM-G: 47]

(9)では, ruḡun「けが」に-gunが付いている。また, humer「顔」, ber「目」, rak'「心」などの身体の一部に-gun/-ginが付いている例もたくさん見られる。(10)は, その一例で, humer「顔」に-gunが付いている。

- (10) razirakijab humer-gun has stakan  
 満足な 顔.ABS-COM この男.ERG コップ.ABS  
 kodobe bosana  
 手.LAT5 取る.PST  
 「満足な顔をしてこの男性はコップを手に取った」 [RG1-G: 394]

どのような拡張的な用法があるか, 詳しくは, さらなる調査が必要である。

#### 4. 名詞等の等位接続

アバール語で二つの名詞を等位接続する場合に使われる最も一般的な方法は、(11)のように、両方の名詞に $-gi$ を付けることである<sup>3</sup>。

- (11) Murtazaŝalica-gi      dica-gi      mun  
 Murtazaali.ERG-CO      私.ERG-CO      あなた.ABS  
 walahulew      wuk'ana.  
 探す.PRT.PRS      いる／ある.PST  
 「Murtazaaliと私はあなたを探していた」 [DG-G: 180]

この他、接続詞 $wa$ を二つの名詞の間に入れて、等位接続を行うこともある。この方法はとても文語的である。

さらに、 $-gun/-gin$ を使って二つの名詞が等位接続されていることがある。この場合、最初の名詞にだけ $-gun/-gin$ を付ける。(12)、(13)、(14)がその例である。

- (12) soldataz-gun      oficerzabaz      riçizarural      wahšilabaz  
 兵隊.PL.ERG-COM      将校.PL.ERG      見せる.PRT.PST      残酷さ.PL.ERG  
 「兵隊達と将校達が見せた残酷さ」 [DJu-A: 117]
- (13) Kawkazalda,      xasgo      Dağıstanalda-gun  
 カフカス.LOC1      特に      ダゲスタン.LOC1-COM  
 Čačanalda,      kkaral      ĩuhabaqinaz  
 チェチェン.LOC1      起こる.PRT.PST      出来事.PL.ERG  
 「カフカス、特にダゲスタンとチェチェンで起こった出来事」 [DJu-A: 73]

<sup>3</sup>  $-gi$ は「～も」を表す場合にも使われる。

- (14) židergo      wacazul-gun      jacazul      erkenlijale,  
 自分達.GEN    兄／弟.PL.GEN-COM    姉／妹.PL.GEN    自由.DAT  
 「自分達の兄弟と姉妹の自由」 [DJu-A: 46]

-gun/-ginのこの用法はかなり文語的なようで、この用法で-gun/-ginをほぼ使っていない本もたくさんある。この用法をたくさん使っている本の方が少ない。

-gun/-ginのこの用法について言及している文献はないと思われる。ただ、Madieva (1981: 142-143) が<sup>s</sup>-gun/-ginの随伴者としての用法と携帯物としての用法を区別せずに紹介している箇所が使われている例の一つは、-gun/-ginの等位接続の例と解釈することができる。しかし、Madieva (1981: 142-143) のロシア語訳は、随伴者の用法であるかのような訳となっている。

二つの名詞を等位接続するために-gun/-ginを使う場合、一般的には、-gun/-ginの前の名詞の格は、後ろに続く名詞の格と同じになる。(12)では名格、(13)では第一位格、(14)では属格になっている。ただし、アバル語は位格、向格、奪格、経路格をそれぞれ5系統持っていて、前の名詞と後ろの名詞の系統が違うことはある。たとえば、前の名詞が第一位格で後ろの名詞が第二位格であるような場合である。

-gun/-ginは、名詞を等位接続する他、形容詞を等位接続する場合にも使われる。次の(15)、(16)がその例である。

- (15) ekonomikijab-gun      socialijab      raqał  
 経済的な-COM      社会的な      側面.ERG  
 「経済的および社会的な側面」 [DG-G: 254]
- (16) bařarab-gun      qaħçarab      sumka  
 赤い-COM      白い点のある      鞆.ABS  
 「赤くて白い点のある鞆」 [DJu-A: 59]

## 5. 動詞の動名詞形との結合

アバール語の動詞は英語の動名詞 (gerund) に近い役割を持った変化形を持っている。アバール語の動詞のこの変化形を動名詞と呼ぶことにする。ロシア語文献では、一般的に、アラビア語文法から取られた *masdar* という用語で呼ばれている。アバール語の動名詞は名詞のようにいろいろな格で変化する。動詞に従属する名詞 (項など) は、定形動詞節の場合と同じ格で現れる。すなわち、自動詞の S は絶対格で現れるし、他動詞の A は能格で現れる。英語の動名詞と同じように、アバール語の動名詞を副詞で修飾することも可能であるが、形容詞で修飾することはできない。

動名詞に *-gun* が付くと「～すると」を表す (Bokarev 1949: 266, Samedov 1996: 168-169)。(17), (18) にその例を示す。

- (17) ḡabdulahil hudul, haw žaniwe wač'in-gun,  
 Abdula.GEN 友達.ABS この男.ABS 中へ 来る.MAS.ABS-COM  
 t'ade jaqana  
 上へ 立つ.PST  
 「この男性が中へ入ってくると, Abdulaの友達は立ち上がった」 [ShG-K: 369]
- (18) Čupanica maxsara habi-gun  
 Chupan.ERG 冗談.ABS する.MAS.ABS-COM  
 ḡodor č'araze kep ššwana.  
 座っていた人.PL.DAT 愉快.ABS 達する.PST  
 「Chupanが冗談をすると座っていた人たちは愉快になった」 [HH-I: 66]

動名詞に *-gun* が付いた形式がたくさん使われている本とほとんど使われていない本がある。方言の影響もあるかもしれないが、文体が影響していると思われる。文語的なようで、堅い内容の本によく出てくるようだ。

先行文献では明示的に述べられていないが、動名詞は常に絶対格形をして

いる。

随伴者を表す際や携帯物を表す際、-gunの代わりに-ginが使われることがある。しかし、動名詞に-ginが付いている形式は、私が調べたテキストでは、見つかっていない。ただ、Bokarev (1949: 266) に-ginの例が1例挙がっている。

## 6. 副動詞に後続する単語

アバル語は、副動詞 (converb), すなわち、動詞の連用形をいろいろと持っている。たとえば、「～して」を表す副動詞 (以下、過去副動詞と呼ぶ) は、動詞の語幹に接辞-un/-on/-nが付いてできる。たとえば、AM-ac'-ine「来る」の過去副動詞はAM-ac'-unとなる<sup>4</sup>。「～しながら」を表す副動詞 (以下、現在副動詞と呼ぶ) は、現在時制の定形動詞に-goを付けて作られる。自動詞の一部では、定形動詞の現在形と平行して、定形動詞の未来形に-goが付いても現在副動詞ができる。たとえば、AM-ac'-ine「来る」の定形動詞現在形はAM-ac'-una, 定形動詞未来形はAM-ac'-inaであり、現在副動詞はAM-ac'-una-goあるいはAM-ac'-ina-goである。この他にも、いろいろな副動詞があり、動詞の語幹に接辞が付いてできている副動詞もあれば、動詞の語幹に接辞が付いてできた定形動詞や分詞 (すなわち、連体形) にさらなる接辞が付いてできている副動詞もある。

副動詞に従属している名詞等に-gun/-ginが付いて副動詞の後ろに置かれていることがよくある。副動詞に従属している名詞等が-gun/-ginを伴わないで副動詞の後ろに来ることは、100%ではないのだが、ほぼない。-gun/-ginのこの用法について述べている先行文献はBokarev (1949) だけである。Bokarev (1949: 265-266) は過去副動詞の後ろに来る単語に-gun/-ginが付くことがあることだけを述べているが、他の副動詞でもそれに従属

<sup>4</sup> 動詞を提示する場合の基本形は不定形である。したがって、AM-ac'-ine「来る」は不定形であり、-ineが不定形を表す接辞である。

している単語に $-gun/-gin$ を付けて副動詞の後ろに置かれていることがある。過去副動詞や現在副動詞はそれ自体とてもよく使われるのであるが、過去副動詞や現在副動詞に $-gun/-gin$ が付いた単語が後続している文はテキストにたくさん見られる。(19)が過去副動詞の例であり、(20)が現在副動詞の例である。

- (19) Č'aha      harun              beral-gun  
大きく      する.PACNV      目.PL.ABS-COM  
walahana      Gulla              Ğoloqančijasuq.  
見る.PST      Gulla.ABS      若い男.LOC2  
「目を大きくしてGullaは若い男を見た」[ShM1-C: 75]
- (20) Ahulago              keč'-gun  
叫ぶ.PRCNV              歌.ABS-COM  
f'urdulél              ruk'ana              hel.  
踊る.PRT.PRS      いる／ある.PST      その人.PL.ABS  
「その人達は歌を歌いながら踊っていた」[MP1-S: 35]

この用法での $-gun/-gin$ は、随伴者や携帯物を表す際の $-gun/-gin$ と比べても、同じ程度、あるいは、それ以上、使われているかもしれない。過去副動詞や現在副動詞以外の副動詞で $-gun/-gin$ がついた単語が後続していることはあまりないが、以下に挙げる例もある。

定形動詞の過去時制や現在時制の否定形に $-go$ が付いて副動詞ができる。たとえば、AM- $ač'-ine$ 「来る」の定形の過去時制の否定形は、AM- $ač'-inč'ó$ となり、それから副動詞AM- $ač'-inč'ó-go$ ができる。また、AM- $ač'-ine$ 「来る」の定形の現在時制の否定形は、AM- $ač'-una-ro$ であり、それから副動詞AM- $ač'-una-ro-go$ が作られる。(21)では、動詞の定形の過去時制の否定形に $-go$ が付いてできた副動詞の後ろに $-gun$ が付いた名詞が来ている<sup>5</sup>。また、(22)では、動詞の定形の現在時制の否定形に $-go$ が付いてできた副動詞に $-gun$ が





形動詞の否定形に-gunが付いてできている副動詞に-gun/-ginが付いた単語が後続している例も1例ある。(26)である。

- (25) Bačuna-gun            laila-gun,            co    k'k'alaqa  
 唱える.PRS-COM    祈り.ABS-COM    一つ 谷-ABL2  
 q'wat'ire    wač'ana    ľabnusgo    řanasew    rek'araw,  
 外へ        来る.PST 300        ぐらいの        馬に乗った男.ABS  
 「祈りを唱えながら馬に乗った人が300人ぐらい谷から外へ出てきた」  
 [HH-I: 252]
- (26) Bosič'o-gun            heb-gun            wussindal,  
 取る.PST.NEG-COM    それ.ABS-COM    もどる.CNV  
 「それを取らずにもどった時」 [MM-G: 247]

上記以外にも副動詞はいろいろとあるが、上記以外の副動詞に-gun/-ginが付いた単語が後続している文は、私が調べたテキストでは、見つからない。

(19)-(26)の例で、-gunが付いている単語は全て絶対格の名詞である。-gun/-ginが付く単語は絶対格の名詞であることが多いのであるが、絶対格名詞以外にも少なからず使われる。(27)では、「ここへ」を意味する副詞に-gunが付いている。

- (27) Rač'un            hanire-gun        kumek        habe.  
 来る.PACNV        ここへ-COM    手伝い.ABS    する.IMP  
 「ここへ来て手伝いをして」 [ShM1-C: 15]

重要なことだと思われるが、絶対格名詞以外の単語に-gun/-ginが付いている場合には、ほとんどの場合に、絶対格名詞が明示的には現れていない。絶対格名詞が副動詞の前に現れていて、その副動詞に絶対格名詞以外の単語が-gun/-ginを伴って後続している例は、私が調べたテキストでは、2例しか

ない。(28)はそのうちの1例である。

- (28) ɫimal            ɫor            c'ezabun            ʒeɕul-gun  
 子供.PL.ABS    ふところ.ABS    満たす.PACNV    りんご.GEN-COM  
 untarazuqe            ɕwadize    ɫuhana.  
 病人.PL.LAT2    歩く.INF    始める.PST  
 「子供達はふところをリングで満たして病人達のところへ歩き始めた」  
 [RG2-A: 210]

## 7. 副詞あるいは形容詞に後続する単語

下に示す(29)では、副詞と見なしていいのか形容詞と見なしていいのかわからない*ʒic'go*「裸で」の後ろに $-gun$ の付いた*hat'al*「足」(複数絶対格)が置かれていて、「足が裸で」、すなわち、「裸足で」を意味している。

- (29) ʒic'go    hat'al-gun  
 裸で    足.PL.ABS-COM  
 jortun            jaɕ'unaan    k'udadaqe.  
 降りる.PACNV    来る.PST    おばあさん.LAT2  
 「[彼女は]おばあさんのところへ裸足で降りてきた」 [MP2-K: 199]

アバール語では、形容詞に長語尾形と短語尾形があり、短語尾形は副詞と同じ形をしているので、どちらに分類していいか難しい場合がある<sup>7</sup>。(29)の場合も、そうした一つのケースである。(29)のように、副詞／形容詞にその従属要素である絶対格名詞が後続していて、その絶対格名詞に $-gun/-gin$ が付いている例がテキストに4例使われている。そこで使われている副詞／形容詞と

<sup>7</sup> 形容詞と副詞のどちらかであると分類することが意味の無いことである可能性もある。

絶対格名詞の組み合わせは、*šic'go*「裸で」と*hat'al*「足」(複数形)が2例で、同じ本の中にあり、残りは、*q'waridgo*「悲しく」と*rak'*「心」、*bačingo*「白く」と*k'al*「口」の組み合わせであり、それぞれ、別の著者、すなわち、三人の著者の本である。-gun/-ginのこのような構造での使用に関して述べている文献はない。興味深い現象であるが、使用例が少ないので、さらなる調査が必要である。

## 8. 副動詞の形成

6節で述べたように、アバール語にはいろいろな副動詞がある。その中に、動詞の定形に-goが付いてできた副動詞がある。同じ意味を持つ副動詞が-goの代わりに-gunを付けて作られることがある。

Bokarev (1949: 269) は現在時制の定形動詞肯定形に-goあるいは-gunが付いて現在副動詞ができると述べている。しかしながら、そこで挙がっている例は3例であるが、全て-goが付いた例であり、-gunの例はない。現在時制の定形動詞肯定形に-goが付いて副動詞ができると述べている文献はたくさんあるが、現在時制の定形動詞肯定形に-gunが付いて副動詞ができると述べている文献はBokarev (1949) 以外ない。それでは、実際のテキストではどうであろうか。現在時制の定形動詞肯定形に-gunが付いてできた副動詞が2例だけ見つかった。この2例は別々の著者の本にある。1例は6節にすでに提示している(25)である。現在時制の定形動詞肯定形に-goが付いてできた副動詞は私が調べたテキストに数千例あるのではないと思われるので、2例はとても少数である。著者の方言の影響が大きいと思われる。

6節で、過去時制および現在時制の定形動詞否定形に-goが付いて副動詞が作られるということを述べた。-goの代わりに-gunが付いてできた副動詞もテキストで使われている。過去時制の定形動詞否定形に-gunが付いてできた副動詞の例は(30)や6節で提示した(26)であり、現在時制の定形動詞否定形に-gunが付いてできた副動詞の例は(31)である。どちらのタイプの副動詞も



に-gunあるいは-ginが付いて副動詞ができると述べている文献は見当たらない。実際のテキストではどうかと言うと、私が調べた限りでは、過去時制の分詞形に-gunあるいは-ginが付いてできた副動詞の実例は見つかっていない。また、過去時制の分詞形に-gonが付いてできた副動詞も使われていない。

## 9. おわりに

本稿では、随伴者を表すのに使われるアバール語の-gunが標準アバール語で書かれ出版されている本でどのように使われているのかについて述べた。随伴者を表す以外、-gunは、携帯物を表すのにも用いられる。また、名詞や形容詞を等位接続するのにも用いられる。動詞の動名詞形に付いて、「～すると」という意味の副動詞の一つとしても用いられる。「～して」を意味する副動詞や「～しながら」を意味する副動詞やその他いくつかの副動詞の従属要素に付加され副動詞の後ろに配置されることもある。これと似ているが、副詞あるいは形容詞と分類される形式の後ろにある名詞に付加されることもある。また、あまり使われない用法であるが、定形動詞に付加されて副動詞が作られることもある。

本稿は、-gunに関する研究の単なる始まりである、-gunについてはさらなる研究が必要である。

## 例文で使ったアバール語の文献とその略号

- [DJu-A] Dadaew, Jusup (1998) Ahul goh — dir rek'el buhi. Makhachkala: Jupiter.  
 [DG-G] Daganow, Şabdula (1997) Şadamal — dir c'wabi. Makhachkala.  
 [HH-I] Hażiew, Husen (1995) Imam Hamzat. Makhachkala.  
 [MP1-S] Murtazaliewa, Pat'imat (1990) Surat. Makhachkala: Daguchipedgiz.  
 [MP2-K] Murtazaliewa, Pat'imat (1995) Kulakasul jas. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.  
 [MM-G] Muhamadow, Musa (1991) Goro-c'er balelde cebe. Makhachkala:

- Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [RG1-G] Rasulow, Ğarip (1996) Ğadamalgi raĞadalgi. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [RG2-A] Rasulow, Ğarip (1996) Aniġġaġul c'wajalda xadur. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- [RG3-U] Rasulow, Ğarip (2006) Uzdenal. Makhachkala: Lotos.
- [ShG-K] ġaxtamanow, Ğumar-Ĥaġi (1994) Q'aral Ğor. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [ShM1-C] ġamxalow, MuĤamad (1982) C'udul was. Makhachkala: Daguchipediz.
- [ShM2-Q] ġamxalow, MuĤamad (2002) Q'isabi wa xarbal. Makhachkala.
- [SulM-L] Sulimanow, MuĤamad (1958) Ĥabgo q'isa. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- [SurM-T] Surxaew, Musalaw (1994) Tusnaqazda GULAGalda. Makhachkala: Jupiter.

## 参 照 文 献

- Ajtemirova, Ajshat X. (2007) Funktsional'no-semanticheskaja xarakteristika poslelogov avarskogo jazyka i predlogov nemetskogo jazyka. Kandidatskaja dissertatsija. Institut jazyka, literatury i iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis avarskogo jazyka*. Moscow, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Madieva, G. I. (1967) Avarskij jazyk. in E. A. Bokarev et al. (eds.) *Jazyki narodov SSSR: Iberijsko-kavkazskie jazyki*. Moscow: Nauka, pp.255-271.
- Madieva, G. I. (1981) *Morfologija avarskogo literaturnogo jazyka*. Makhachkala: Daguchpedgiz.
- Samedov, Dzhilil S. (1996) Slozhnoe predlozhenie v avarskom jazyke v sopostavlenii s russkim. Doktorskaja dissertatsija. Dagestanskij Gosudarstvennyj Universitet. Makhachkala.
- Surxaeva, Sijadat A. (2007) Sluzhebnye chasti rechi v avarskom jazyke. Kandidatskaja dissertatsija. Institut jazyka, literatury i iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.